

1. 公開講座紹介(第一回)～「連携」の形を探る試み～

今年度のニューズレターでは、公開講座の実際の様子を知って頂くために、毎号いくつかの講座を取り上げ、ご紹介します。

本号では、公開講座の新しい方策を探る試みとして他機関との「連携」に焦点を当てることとします。トップバッターは、工学部岡野眞教授の「建築をめぐる協調関係(Ⅰ)」(5月10日～6月21日、隔週火曜日、18:30～20:00、全4回)です。

(1) 建築をめぐる協調関係(Ⅰ)(Ⅱ)

<開講までの経緯>

昨年度の公開講座パイロットプロジェクト以降、企画いただく学部及び研究科の先生方とセンター専任教員が直接お話ししながら公開講座の準備を進めています。受講者数等、成果のほどは別として、私たちが出向いて説明したり、相談させていただくことについては概ね好評のようです。

ここで、工学部の岡野眞教授との事前の打ち合わせを通して見えてきた公開講座の新しい可能性についてご紹介します。

岡野先生のご専門は建築で、公開講座としては今年度初めて「建築をめぐる協調関係Ⅰ・Ⅱ」を開講いただいています。計画に際して、受講対象を市民一般よりも建築従事者に重点をおこうということで、日本建築学会四国支部や日本建築家協会四国支部香川地域会をご紹介いただきました。受講者の確保をすべく、後援名義をいただきに役員会に出席したり、研修会場に足を運んだりするうちに、建築実務家の会員が大学(工学部)に求める期待を肌で感じることができました。

建築士は専門性の維持と向上のためにCPD(Continuing Professional Development:継続能力開発)制度を確立し、会員の資質向上を目指していることを知り、職業人再教育への貢献を改めて考えるきっかけを得ました。今回はかないませんでした。関係機関とのタイアップでCPDプログラムに公開講座を位置づけることにより双方にメリットがあることを実感しました。公開講座は、フレキシブルな開講が可能であり、比較的短時間で修了できる利点があり、多忙な職業人のスキルアップや知識のリフレッシュに最適です。ひとつの重要な方向性をいただいたような気がしています。

生涯学習教育研究センターとしては、大学と市民、大学と職業人を有機的につなぐ役割をさらに担っていきたいと考えています。先生方の一層のご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。



<岡野先生インタビュー>

—なぜこのような公開講座を開講しようと思われたのですか？

岡野:大学と地域との連携ということで、私が貢献できることを考えますと、建築や生活環境に関わる分野でしょうか。そこで長年温めているテーマである建築家フランク・ロイド・ライトを取り上げることにしました。と言いますのも、F.L.ライトという人は地域の風土・伝統に根ざした建築を目指した第一人者なんです。地方分権や地域の自立が唱えられている現在、建築を通して地域を考え、見直すきっかけになれば

と考えたからです。これまでも専門家を対象にお話させて頂く機会があったのですが、建築とはそもそも建築する人、すなわち住む人や使う人が主役であるべきです。ところが多くの場合、自動車を買うように規格品としての住宅を買っています。そうではなく自らの生活環境や住宅について、もう少し主体的に考えていただきたいというのが私の願いです。

ー通常の工学部の講義と公開講座とは勝手に違うかと思いますが、そのあたりどのようなことを心がけていらっしゃいますか。

岡野:工学部の授業では計15回、公開講座は4回です。工学部では建築の背後にある社会のシステムや哲学などを含め、論理的な構成を心がけていますが、公開講座ではむしろ視聴覚資料を多用することによって、感性に訴えるような講義にしています。やはりプレゼンテーションは重要ですね。昨年度、大学の台風災害調査団の中で、「浸水と建築被害」を担当したのですが、これからはインド洋大津波の映像が顕著だったように、静止画よりも動画の方が圧倒的に情報量が多い。今後は研究資料はもちろん教材としても、動画の活用を積極的に進めたいと考えています。

ーありがとうございました。

2005年5月24日(火)、聞き手:山本珠美(センター専任教員)

(2) NPO～新しい香川を生みだすカ～



2つ目にご紹介する講座は「NPO～新しい香川を生みだすカ～」(平成17年5月14日～7月9日、隔週土曜日、13:30～15:30、全5回)です。

昨年度のニューズレターVol.1 No.3でもお伝えしておりますとおり、生涯学習教育研究センターでは、地域の指導者養成事業の一環として、平成14年度より「人々の学びを支える実務者のための研修講座」(高松市生涯学習センターとの連携事業)、また平成16年度より「かがわ県民カレッジ研究・実践講座」(香川県教育委員会との連携事業)に取り組んでおりますが、更に県内NPOに対する貢献も期待されるようになっていきます。

1998年に特定非営利活動法人促進法が成立して以来、NPO法人は増加の一途にあります。内閣

府の集計によると、2005年5月末現在までにNPO法人認証数は全国で2万2千団体弱、香川県では128団体となっています。しかし、全ての団体が必ずしもスムーズな活動を行っているとは言い難い状況にあるようです。

NPOの自立性を高め、活動の活性化を促進するためには、人材育成システムの整備が急務です。香川県は、県内の大学や行政機関をはじめ各種団体等でそれぞれに実施されているボランティア・NPO研修と連携をとりながら総合的な研修体制の整備を図ること、換言すると、県民の幅広いニーズに応えられる人材育成ネットワークの形成を一つの政策として掲げています。県はこの目的達成のため特定非営利活動法人香川ボランティア・NPOネットワークに事業委託し、平成15・16年度に「香川県ボランティア・NPO研修連携協議会」が設置されました。生涯学習教育研究センターからは、平成15年度は清國、平成16年度は山本が委員として参加しました。

香川大学の同事業への貢献として、今年度、香川県および(特)香川ボランティア・NPOネットワークとの共催により、NPO実務者研修として位置づけられる本講座を実施することとなりました。開催前には、生涯学習教育研究センターにおける通常の広報以外に、県の広報紙や西日本放送のラジオ番組「こんにちは香川県です」に専任教員が出演して宣伝に努めました。

2. 平成16年度萌芽研究報告

～「市民活動を支える生涯学習教育研究センターの役割に関する研究」～

前の記事で述べましたように、当センターではNPO実務者研修を公開講座として実施することとなりました。とはいえ、これまで当センターとNPOとの組織的な関係は皆無と言って良く、またNPOを専門とする研究者もいないため、他大学のNPO関連のカリキュラムの実情について知る必要がありました。

カリキュラムはもちろんですが、長期的視野に立って、大学のNPO支援、あるいは大学とNPOとの連携のあり方全般について調査する目的で、平成16年度萌芽研究に「市民活動を支える生涯学習教育研究センターの役割に関する研究」(研究代表者:山本珠美)を申請したところ採択されました。そこで、2005年3月6日から3月13日まで訪米し、NPOとの関係において一日の長のある東海岸の3大学(ハーバード大学ジョン・F・ケネディ・スクール附属ハウザーNPOセンター、イエール大学マネジメントスクールのNPOプログラム、ニュースクール大学ミラノ大学院NPOマネジメントコース)の現状について調査しました。

米国のNPOは米国建国の歴史とともに始まると言われています。しかし、米国の大学にNPOに特化した附属センターが作られたり、また特別なプログラムがはじめられるようになったのはそう古いことではなく、1978年、イエール大学にNPOプログラムが設立されたのがその嚆矢であるといえます。

ハーバードおよびイエール大学では、NPOセンター(およびプログラム)の機能として、公共政策大学院あるいはビジネススクールの特性を活かしたNPO支援および大学とNPOとの連携のあり方について関係者へインタビューし、また資料収集を行うことができました。また、ニュースクール大学を含め、すべての大学でNPO関連の講義資料を入手することができました。

加えて、ハーバード大学ケネディ・スクールでは、MPAコース(2年課程)およびMPA/MCコース(1年課程)の学生7名(いずれも実務経験のある社会人学生)に対しインタビューする機会を得ることができました。そこで、「入学までの経緯」「現在受けている大学教育」「将来のキャリアプラン」の3側面に焦点を当てて話を伺いました。

NPO運営の専門化が進む一方で本来のボランティア精神からの乖離が指摘されている米国のNPOに対する大学の支援のあり方と、脆弱な財政基盤の下で継続的安定的な運営に苦慮している日本のNPOに対する大学の支援のあり方には当然違いもあります。しかし参考となる点がないわけではありません。例えば、ハウザーセンターのように、NPO運営に必要な能力・スキルを身につけさせるための新たな科目を開設するのではなく、既存の開設科目(必ずしも親組織であるケネディ・スクールのみならず、学内他部局、近隣他大学の科目をも含む)をもとにカリキュラムを組み学生に提供することです。それが学内連携および大学間連携となっているようです。



【ハウザーセンターにて、NPO研究第一人者のピーター・ホール氏と】

また、地域貢献の一環として将来的に増加が見込まれる社会人学生についても考えさせられることがありました。インタビューした学生が、学習環境から遠ざかっていた社会人学生に対する学習面および精神面におけるケア体制が充実していることをハーバード大学の優れた点としてあげていたことです。「学習面での悩み」と「精神面での悩み」、あるいは「生活上の悩み」は別々のものではなく連続しているものであり、社会人学生をトータルに支援する全学的な体制の必要性を改めて感じました。

調査全体については、近日発行予定の『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告第10号』掲載の論文をご覧くださいと思います。



【マンハッタン島の街中にあるニュースクール大学ミラノ大学院。多くのNPO実践家がパートタイム学生として学んでいる。】

3. 平成17年度かがわ県民カレッジ

平成17年度かがわ県民カレッジには、家庭教育、男女共同参画、健康の3コースが設定されています。香川大学では、下記9講座において、県民カレッジ生(社会人学生)が一般学生とともに学ぶこととなります。

県民カレッジ生は、将来、地域の指導者としての活躍が期待されています。そのため、学習支援技法習得として、公開講座「ワークショップの技法を学ぶ」(担当教員:清國祐二、2005年7月13日～8月10日の毎週水曜日13:30～16:30、受講料:5,000円)を必修科目としています。また、昨年度、県民カレッジ生よりレポート執筆についての相談が寄せられたため、選択科目として「レポート・小論文の書き方講座」も前期・後期にそれぞれ開講する予定です。

<平成17年度かがわ県民カレッジ公開授業一覧>

コース名	公開授業名	担当教員	曜日・時限	回数	学期	受講料
家庭教育	幼児心理学	川田 学	月曜・3限	6回	後期	4,000円
	生涯発達心理学	中塚勝俊	金曜・4限	9回	後期	5,000円
	家族援助論	上玉啓子	水曜・2限	6回	後期	4,000円
男女共同参画	家族関係学	時岡晴美	火曜・2限	8回	前期	5,000円
	メディア論	武重雅文	金曜・2限	9回	後期	5,000円
	ジェンダー論	加野芳正	木曜・3限	8回	後期	5,000円
健康	健康論	上杉正幸	月曜・2限	10回	後期	5,000円
	脳とその病気※1	板野俊文	金曜・夜間	※1	後期	5,000円
	病気にならない知恵と工夫※2	渡邊精四郎他	金曜・夜間	※2	後期	7,000円

※1 後期公開講座として開催。金18:00～20:00、9月30日～10月21日、全4回。

※2 後期公開講座として開催。金18:00～19:30、10月28日～12月2日、全6回。

4. 平成17年度公開講座の追加募集、締切迫る！

今年度より公開講座の募集を12月と6月の年2回実施する運びとなりました。

メールにてすでにご連絡してありますとおり、6月1日より今年度後期分の公開講座追加募集が始まっています。締切は今月末です。計画の詳細は本センター専任教員との協議の中で詰めていただければ結構ですので、頭の片隅に構想がありましたら、是非ともお申し込み下さるようお願いいたします。



申込先: センター事務室

内線:1273 メール:syogse@ao.kagawa-u.ac.jp



問合せ先: センター専任教員 清國祐二

内線:1272 メール:kiyokuni@cc.kagawa-u.ac.jp

センター雑感

高松に来て3年余り。それまで松江が9年、内イギリスに1年ということもあり、雨には慣れっこだ。雨不足とは縁遠い生活が続いていた。何の因果か、昨年はここ高松でも高潮と台風災害。マスエモンの「想定外」に同情はするものの、自然の気まぐれには閉口する。10年ほど前の早明浦ダムの干上がった様子はテレビの向こうの世界で、当事者意識に乏しかった。しかし、今年はどうやら違うようだ。

ひょっとすると、昨年の助け合いとは違った局面を迎えるかも知れない。節水による助け合いは個々の努力が見えにくい。つまり、野放図な人も見えなければ、儉約している人も見えない。人のエゴが最も出やすい領域である。湯水の時こそ、人間性が見えてくるのではなからうかと、私は思う。大学も同じである。(清國)

1. センター長退任にあたって

上杉 正幸

法人化のスタートとともに、企画担当理事としてセンター長を勤めて参りましたが、この度退任するにあたり、センターの活動にご協力いただいた教職員の皆様へ一言御礼を申し上げます。

法人化の是非はさまざまですが、センターにとってはこれまでの制約を破り、新たな可能性を広げるチャンスでもありました。そのチャンスを生かす為に、二人の若い専任教員と一人しかいないベテラン事務官とで知恵を絞り、さまざまな試みにチャレンジしてきました。パイロット・プロジェクトとして始めた公募型公開講座や、香川県が行う生涯学習講座と大学の授業との連携を図った県民カレッジ、NPO法人との共同公開講座、資格取得を視野に入れた公開講座などがその試みです。特に公募型公開講座については、法人化後の新たな講座形態の試みとして文科省からも高い評価を受けました。

これらの事業をスタートさせ、1年目の実績を上げることができたのは、多くの教職員の皆様のご協力のおかげであり、センター長として心から御礼申し上げます。

今後当センターが、地域との結びつきをより一層深める事業を展開し、香川大学の個性化に貢献するセンターとなることを願っています。そしてそのために、多くの教職員の方々のご協力をお願いし、退任のあいさつとさせていただきます。

2. 公開講座紹介(第二回)～夏休み子ども向け企画～

2回目となる公開講座紹介は、7-8月の小中学校の夏休み期間中に開講された全5講座の子ども向け講座の中から、仲谷英夫工学部教授による「恐竜を復元しよう」(7月26～28日と8月8～10日の2回実施、いずれも連続3日間、13:00～15:00)と、植田和也教育学部助教授による「“ふしぎ”を考えるー科学手品、数を使ったトリック、マジックで「なぜ、どうして」の心をふくらまそうー」(7月23日・30日、全2日間、10:00～15:00)の2講座をご紹介します。

(1) 恐竜を復元しよう

<開講までの経緯>

本年5月、香川大学に大学博物館研究機構が発足したことは既にご存じのことと思います。大学は膨大な資料・標本を所蔵しており、同機構はそれらを整理し公開することを目的としています。

博物館活動は「収集」「保管」「展示」、そして「教育普及」が4本柱と考えられています。すなわち、資料・標本の公開に際し、単に展示するだけでなく、その資料・標本を効果的に用いた教育活動も重要な機能なのです。とはい

え、同機構の当面の業務は、学内に所蔵されている資料・標本のリストアップとなりますから、博物館機能のうちの教育普及に関しては生涯学習教育研究センターが協力することになりました。当センターにとっても、大学特有の資料・標本を用いた講座の実施は、大学博物館の教育普及機能の一翼を担うというだけでなく、他の生涯学習機関との差別化を図る上でも大いに意義のあることと考えております。

今回、その協力事業の第一歩として、仲谷先生が所有している恐竜プロバクトロサウルス一頭分のレブ



リカを活用した公開講座の開設を提案したところ、ご快諾頂きました。

おかげさまで4月11日(月)の受付開始からわずか1週間で定員が埋まってしまうという予想外の反響を得ることができました。そこで急遽仲谷先生にはご無理をお願いして、同じ内容の講座を別日程でもう一回設定して頂くという異例の事態も生じました。

<講座風景>

全3日間の講座は、はじめの2日間で人と恐竜の骨格の違いや化石についてビデオ視聴や実物標本を用いながら学び、最終日にプロバクトロサウルスのレプリカの組み立てを行いました。

受講した子どもたちの反応も上々で、アンケートには「化石や骨一つでいろんなことが分かるんだなあ」「骨の組み立てが楽しかった」などの声が寄せられていました。

また、同講座の様子は8月10日のNHK「情報ワイド香川」でも紹介されました。

今回のような公開講座は、他ではできない、大学ならではの企画と言えるでしょう。

(2) “ふしぎ”を考えるー科学手品、数を使ったトリック、マジックで「なぜ、どうして」の心をふくらませようー

<開講までの経緯>

植田和也助教授は香川県教育委員会との交流人事で本学教育学部に勤務され、今年で3年目を迎えています。学内外で意欲的に活動され、さまざまな地域における講座を担当されたりと、社会貢献にも熱心に取り組まれている先生です。

今回の公開講座のベースは「マジック」と「科学実験」にあります。そのきっかけは、植田先生が平成9年に日米教員海外派遣でオレゴン州に行かれることになり、言葉を越えたコミュニケーションツールとしての手品と向き合うことにありました。この手品が実は科学実験にも通じ、かつ人間関係づくりで大いに役立つということを実感し、この世界に深く関わるようになり、子どもたちに関わることの喜びを知ってもらうための学校現場での実践活動はもとより、昨年5月には香川大学の手品サークル「メルシー笑クラブ」も立ち上げ、現在も精力的に活動されています。

一方、昨今の教育問題として「学力低下」があげられており、特に「学ぼうとする力」の衰えが深刻さを増しています。今回の公開講座は、子どもたちに「なぜ、どうして？」の気持ちを芽生えさせ、「考えることの楽しさ・愉しさ」を伝えたいという植田先生の強い気持ちで企画されました。実は、マジックや科学実験の向こうにある、私たちが置き去りにしてきたものを思い起こさせるメッセージを込められたのかも知れません。



<講座風景>

講座では、植田先生が次から次へと繰り出す手品・トリックに子どもたちが熱心に取り組んでいる姿が印象的でした。また、初回には隆祥産業にインターンシップで訪れているドイツ人留学生スヴェン・コッツさんの飛び入り参加というハプニングがあったのですが、子どもたちは早速学んだばかりの“数のマジック”を披露してくれました。

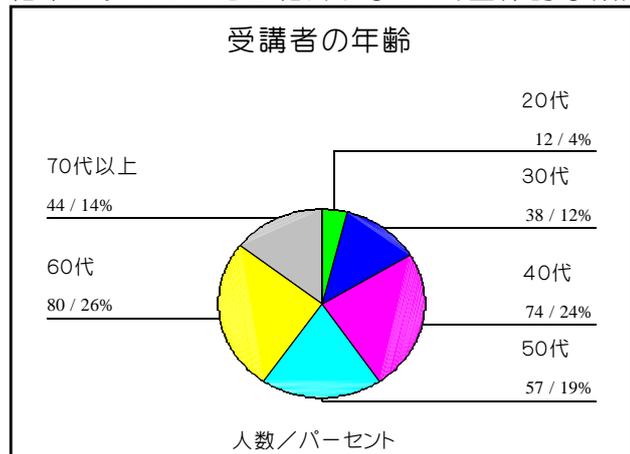
3. “公開講座”考(第一回)

本号から、データと理論の両面から公開講座について考えることとします。

(1) アンケート結果から見る公開講座(その1)

公開講座終了に当たっては、受講生の方々にアンケートの記入をお願いしています。昨年度は311名の方から提出頂きました(修了証書授与者435名)。その結果について本号から数回に渡ってご紹介しながら

ら、公開講座の現状と課題について考えたいと思います。本号ではまず昨年度のアンケートの単純集計結果のいくつかをご紹介しますながら、全体的な傾向を見てみることにします。



まず、公開講座受講者の属性はどうなっているのでしょうか。

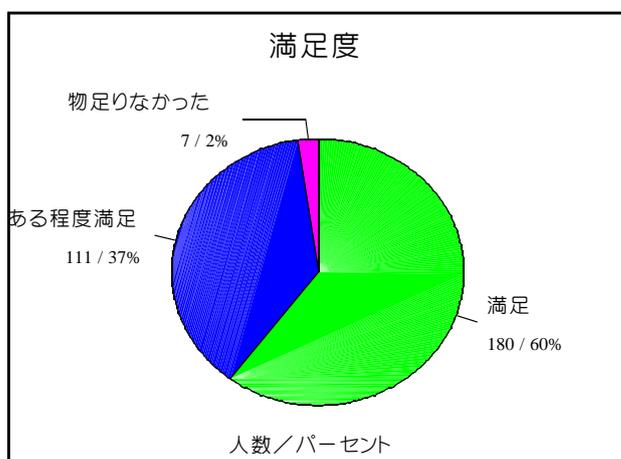
男性と女性の比率は、男性が93名(30%)、女性が212名(70%)と女性の受講者が多くなっています。

年齢別に見ると、左の円グラフの通り、最多年齢層が60代の26%、続いて40代(24%)、50代(19%)、70代以上(14%)となっており、40代以上で8割以上を占めていることがわかります。公開講座は現状では中高年層の支持を受けている反面、20代30代の若年層にとって魅力のある講座を考えることが今後の課題と言えましょう。(なお、昨年度までのアンケートでは10代以下の項目は設定していませんでした。)

次に、受講回数を見ると、公開講座をはじめて受講された方が112名(37%)、二回目の方が43名(14%)、そして三回目以上の方が150名(49%)となっています。一度参加した方が、二度、三度と繰り返し受講する、いわゆるリピーターが3分の2弱を占めていることがわかります。リピーター＝固定客が一定程度以上いるということは、毎年ある程度受講生が見込めるといえるというメリットがあります。とはいえ、新しい受講者層を開拓していく努力も必要でしょう。

ところで、参加した受講生の満足度はどうでしょうか。グラフから分かるとおり、6割の方が「満足した」、4割弱の方が「ある程度満足した」と答えて下さっており、満足度は高いと言えます。ただ、「満足」と「ある程度満足」の違いはどうして生じるのでしょうか。その差が気になるところでもあります。

クロス集計結果や、自由記入欄に寄せられた声などについては次号以降でご紹介します。(文責:山本珠美)



(2) 成人教育理論の視点から公開講座を考える(その1)

公開講座を担当下さった先生方の中には、成人学習者の学習意欲に大きな可能性を感じたり、持論を展開する学習者に戸惑いを覚えたり、さまざまな経験をおもちのことと思います。数多くの成人学習者に触れてきた筆者の経験も生かしながら、今後、シリーズで成人教育について取り上げていきます。まずは、受講生の声から拾いあげたものを紹介します。

公開講座の受講生の多くは、大学での学びに大きな期待をもって参加します。地域で実施される講座とは異なり、有料講座ですからとても熱心な受講態度です。アカデミズムに触れることはもちろん、先生方のパーソナリティに惹かれてリピーターとなる受講生も少なくありません。伝統的學生とは明らかに異なる知との出会いを求めています。

その成人学習者との関わりの中で分かってきたことがあります。今回は2点紹介します。ひとつは、基本的なことになりますが、担当講師の「声を届ける」ことへの関心です。充実した内容の講座であっても、その声が聞き取りにくいとすれば受講生のもとに届きません。声の大きさだけであれば備え付けのマイクの音量調整でいけますが、声は発するだけでは必ずしも十分ではなく、**ひとりひとりに届けようとする意識と姿勢**が必要なようです。もうひとつは、「十分な資料」の準備です。公開講座の受講生はとても勉強熱心ですから、大学以外の場所でも多くの学習経験をもっています。いくら話術に長けていても、配付資料が受講生の学習を深化させるものになっていないと、トータルの満足度は下がってしまうようです。**知的好奇心を刺激する魅力的な資料**は、受講生の自己学習への意欲を喚起すると考えていただくといいでしょう。ちょっとしたことですが、参考になれば幸いです。

次回からは成人教育学者M. ノールズのアンドラゴジー論をご紹介します。(文責:清國祐二)

4. 平成17年度高松市地区公民館職員研修会

高松市地区公民館職員研修会は当センターの主催事業の一つで、公民館職員の資質向上のため、ひいては地域社会における生涯学習の活性化のために、平成15年度に開始されました。

自己点検ワークシートを使って自館を見直す機会をもちたり(6月)、日々の社会教育活動の中で収集された情報の扱いについて、著作権や個人情報保護との関係について考える(8月)など、演習形式で進めています。

<平成17年度研修プログラム>

日 程	テ ー マ	担 当
5/20(金)	地域づくりと地域教育計画	清國祐二
6/21(火)	施設経営のための施設評価のあり方	山本珠美
7/21(木)	事例から見る行政機関の機能と役割	山本珠美
8/19(金)	情報収集の手法と情報提供・相談活動	山本珠美
9/21(水)	助成や委託を得るための企画書作成の技法	清國祐二
10/21(金)	事例から見る地域づくりの成果と課題	清國祐二

5. 『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第10号のお知らせ

毎年発行している『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』は、生涯学習を研究する本学教員、センターが主催あるいは協力する講座等を担当した本学教員であれば、どなたでも投稿することができます。

最新号(第10号)の内容は以下のとおりです。ご関心のある方はセンター事務室までお問い合わせ下さい。なお、次号(第11号)の原稿募集につきましては、本年12月中旬頃に正式に通知いたします。

<研究論文>

大学生のボランティア学習の評価に関する実証的研究	清國祐二
高松市及び周辺市町の生涯学習機会に関する調査(II)	清國祐二
ドイツ教育研究省‘Futur’リードビジョン 「明日の学びの世界へのアクセスを開かれたものとするために」～解説付き～	山本珠美
2004年度香川大学萌芽研究 「市民活動を支える生涯学習教育研究センターの役割に関する研究」報告	山本珠美・清國祐二

<公開講座>

情念の問題:人間論的考察	
アーレントとソクラテス	建島正秋
ルターと親鸞における苦難と信仰ー宗教的パトスの一類型ー	中谷博幸
共感と道徳	斉藤和也

センター雑感

健康診断で一番気になることと言えば、やはり体重。。。などと言っていたのは、私に限って健康診断に引っかかるわけではない!と高をくくっていたから。要精密検査と言われ、病院に出向き、どんな結果が出るのか不安な一時期を過ごしました。結果的に何の異常も見つからず大事には至りませんでした。親しい人に「職場で健康に気遣ってもらえるのは有り難いこと」と言われ、健康診断の有り難みを感じました。

芸術の秋、スポーツの秋、読書の秋、はたまた食欲の秋(!)、秋には楽しみがたくさんあります。皆様もどうぞ健康には十分留意しつつ、秋を堪能して下さい。(山本)

1. 新センター長の挨拶



加野 芳正

この度、上杉前理事の後を受けて生涯学習教育研究センター長に着任しました。このセンターに関しては、四国地区の社会教育主事講習の担当、学長の一井先生がセンター長時代の将来構想の策定など、何かと縁がありました。今と違って、大学開放センターと呼ばれていた時代は全国に3大学しかなく、行政やマスコミなどが主催する生涯学習プログラムは貧弱でしたので、センターは存在感がありました。また、大学の地域連携という点ではシンボリック的存在でした。しかし、今日では地域社会との連携といえは「産学連携」が中心となっています。センターをめぐる社会環境はすっかり変わりました。

「地域に根ざす」という香川大学の目標からすれば、当センターの役割は大きなものがあります。そして、地域社会における生涯学習の振興という任務を果たすには、先生方のご協力が不可欠です。これまで同様、センターへのご支援をどうか宜しくお願いします。

2. 公開講座紹介(第三回)～現代的課題を学ぶ～

大学が提供する公開講座として相応しいテーマは何かということは、繰り返し問われることであります。本号では、日本社会が直面する現代的課題に対応することを目的に、連合法務研究科および医学部により最新の研究成果を踏まえつつ開講された二つの講座をご紹介します。

(1) 模擬裁判を体験する

<開講までの経緯>

司法改革の一環として、市民が刑事裁判に参加する「裁判員制度」が2009年5月までに実施されるよう、必要な法整備が行われました。市民に対する法教育の必要性はかつてない高まりを見せています。司法改革の一環として法科大学院も各地で設立されておりますが、香川大学でも、日本で唯一の連合法務研究科を愛媛大学と開設し、新しい法曹養成制度の一翼を担っています。

今回、連合法務研究科の草鹿晋一助教授による提案で、市民の司法制度理解を深めるための試みとして、本講座が開講されることになりました。草鹿先生はご専門(裁判制度、民事訴訟法)を活かして学内外でご活躍ですが、ご自身だけでなく、刑事訴訟法がご専門の田淵浩二教授、現役の弁護士でもある吉成務教授および大学院生とともに周到な準備のもと講座に臨んでいただきました。

【平成17年11月19日(土)、連合法務研究科模擬法廷教室】



<講座風景>

講座前半は法律や裁判についての基礎理解を図るもので、静かな熱気に包まれながら進行しました。具体的なシナリオが提示され、受講者自らが役割を演じる段階に入るとその熱気は見える形で高揚し、事前の打ち合わせなど、時間を忘れて取り組んでいました。いざ、本番です。検察と弁護士、裁判長、被告人、受講者からは多少の照れと戸惑いが感じられたものの、それぞれがしっかりと役割を果たしていました。核心をつく質問、誘導的な尋問、情緒的な反論等、振り返るととても学習の深まりそうな模擬裁判になりました。講座修了後の受講者の安堵と満足感に包まれた笑顔が印象的でした。

(2) 病気になるしない知恵と工夫～医療現場から最新のメッセージ～



本講座は石田俊彦教授ほか、計6名の医学部の先生方のご協力により、オムニバス形式で実施されました。癌や糖尿病、うつ病予防など、健康に関する地域の人々の関心は高く、43名の受講生の方が講師の話を中心に聞いていた姿が印象的でした。

なお、公開講座は香川大学内だけで実施しているわけではありません。高松市と連携し、年に2-3講座を片原町にある高松市生涯学習センター（通称まなびCAN）で開催しております。（平成17年度は本講座と、経済学部山田仁一郎助教授らによる「明るいシニアライフ戦略～国際比較から考える制度・家族・個人～」との2講座。）

【平成17年11月11日（金）、まなびCAN】 当センターでは、来年度以降も、今回ご紹介したような社会の動きに対応した講座、地域の人々のニーズに応える講座を企画していきたいと思っております。

3. 第27回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会

2005年11月25日（金）、26日（土）の二日間、和歌山県のコガノイベイホテルにて第27回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会が開催され、当センターからは専任教員山本珠美が出席しました（当番校：和歌山大学生涯学習教育研究センター）。

初日は和歌山大学長小田章氏の挨拶、文部科学省生涯学習政策局政策課地域づくり支援室室長補佐佐藤誠氏による記念講演、滋賀大学生涯学習教育研究センター長住岡英毅氏の基調講演「地方国立大学における生涯学習系センターの役割」の後、出席者の意見交換がなされました。また二日目には「生涯学習系センターを起点とした地域と大学の関係づくり～和歌山大学生涯学習教育研究センターの場合～」をテーマとしたシンポジウムが開催されました。

協議会では昨年度に引き続き、公開講座に積極的に取り組んで下さる教員に対していかなるインセンティブで応えるかが関心の一つでした。多くの大学は検討中ということでしたが、北海道大学や鹿児島大学が受講料収入の一定割合を担当教員の所属する部局へ配分する方式を、また福島大学では1時間あたり3,000円を講座準備費という名目で研究費として上乗せ配分を行う方式を取るなど、動きの見られる大学もありました。

その他、関心を集めた事例として、琉球大学と民間旅行代理店との連携による滞在型観光と連続講座を組み合わせた新企画、「シニア短期留学プログラム」が挙げられます。午前中は琉球大学教員による沖縄の文化・自然・歴史等に係る講義、午後は観光という構成で、2週間にわたって実施したそうです。参加者の満足度も非常に高く、また採算的にも成功だったという報告でした。旧来の自治体との連携とは違う新たな事例として注目を集めていました。

4.“公開講座”考(第二回)

(1) アンケート結果から見る公開講座(その2)

前号ではアンケートの中から単純集計の結果をいくつか取り出しご紹介しました。本号では、クロス集計の結果を抜粋してご紹介しましょう。

前号で受講生の満足度は高いものの、「満足できた」と「ある程度満足できた」の違いはどうして生じるのだろうか、ということを書きました。このあたりのことを探るために受講生の属性とクロスしてみます。すると、表1のように概して年代が上がるほど「満足できた」の割合が下がる傾向にあることが分かります。また、職業別では、表2のように主婦や自営業、公務員の方の「満足できた」の割合が比較的高いことに比べ、会社員や無職の方の場合は「ある程度満足できた」の方が高くなっていることが分かります。グラフは載せていませんが、男女別では女性の方が男性より「満足できた」の割合がやや高く、公開講座の参加回数別では、回数が増えるほど「満足できた」より「ある程度満足できた」の割合が若干高くなる傾向にあります。

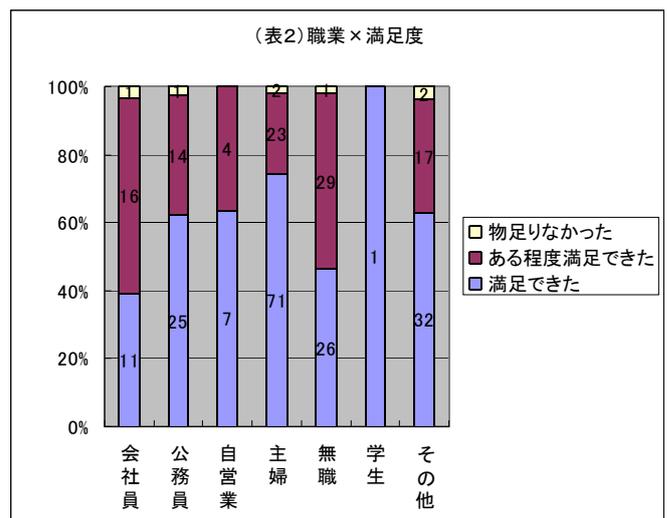
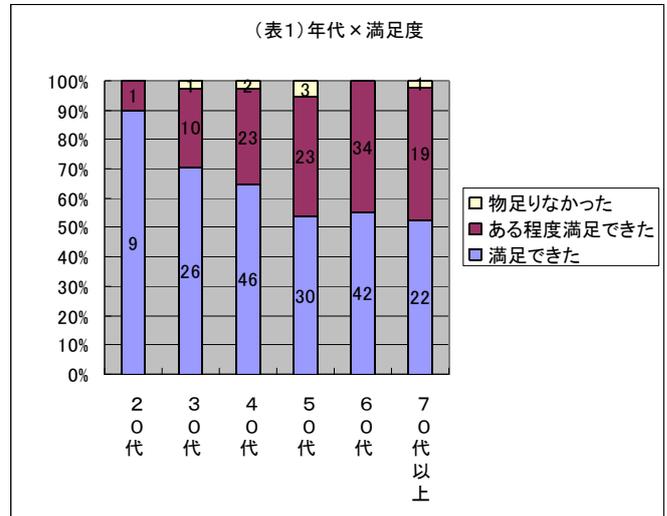
これは属性によって公開講座に求めるものが異なるがゆえの結果かと思われます。すべての受講生の満足度をより一層高めるとするのはなかなか難しいでしょう。しかし、ここで1つだけヒントを挙げましょう。実は、アンケートにはしばしば「**文字が小さすぎて高齢者に優しくない。**」との意見が寄せられているのです！この程度のことであれば、来年度からでもすぐに改善できるのではないのでしょうか。文字の大きさというのは1つの例にすぎませんが、公開講座の場合、担当教員が**高齢の学習者に配慮する姿勢を持つ**ことは大切なことと思われます。

次号では自由記入欄に書かれた受講生の生の声から公開講座の課題について考えることとします。(文責:山本珠美)

(2) 成人教育理論の視点から公開講座を考える(その2)

アメリカの成人教育学者M. ノールズのアンドラゴジー論(andalogy)を紹介しつつ、成人教育のあり方について考えてみます。まず、ノールズのごく簡単な経歴ですが、1913年生まれ、21歳でハーバード大学を卒業し、しばらく青年教育の現場に関わっています。YMCAを中心に成人教育の実践に携わりながら、シカゴ大学で修士号、博士号を取得し、48歳よりボストン大学教授として教育研究活動に従事しています。成人教育の領域で実践から理論へ、理論から実践へ、精力的に著述活動を行いました。

ノールズの理論の特徴のひとつに、成人性の発達と学習との関係を精緻に記したことがあげられます。別の言い方をすると、成人教育を「教授から学習へ」とパラダイムシフトさせたといえるでしょうか。その背後には、成人性が成熟に向かうにつれ、人は自律性が高まり、より能動的になり、客観的な判断力をもつようになり、広く社会に関心を向けるようになり、自己受容的になることなどがあげられます。他にも数



個の項目をあげながら、学ぶ主体である成人のとらえ直しをしました。これら成人性の成熟を前提とするならば、自己主導的学習(self-directed learning)を支援することこそが成人教育の中心に据えられ、教師の役割は援助や情報提供に重きが置かれることになります。

しかし、すべての成人が成熟した成人性をもちあわせているのか、あらゆる学習内容が自己主導的に進められるのか、という疑問も同時に湧いてきます。それについてノールズは、子どもを対象とした教育学であるペダゴジー論(pedagogy)と対照させながら、最も効果的な学習方法を選択することこそが重要であるとしています。換言すれば、公開講座であれ、社会人学生の授業であれ、私たちは常に最適な教育内容および方法を用い、学生に向き合う必要があるということでしょう。(文責:清國祐二)

5. 平成18年度公開講座募集

すでにメールでお伝えしております通り、12月1日より来年度の公開講座の募集が始まっております。開講ご希望の方は、**平成18年1月20日(金)まで**に、配布いたしました計画書をセンター事務室までご提出下さい。

公開講座は香川大学の教育面での地域貢献事業です。講義だけでなく実習・実技なども積極的に取り入れた、魅力的な企画をお待ちしております。

 申込先: センター事務室 内線1273 syogse@ao.kagawa-u.ac.jp

 問合せ先: センター専任教員 清國祐二 内線1272 kiyokuni@cc.kagawa-u.ac.jp

6. 『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第11号原稿募集

当センターでは毎年度『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』を発行しております。生涯学習を研究する本学教員、センターが主催する講座等を担当した本学教員、また、センターが主催する講座等を担当した学外講師で編集委員会が認めた者であれば、どなたでも投稿することができます。

すでにメールでお伝えしております通り、投稿ご希望の方は、所属、氏名、論文仮タイトルを**平成18年1月20日(金)まで**にセンター事務室または下記担当教員までご連絡下さい。

原稿締切は**平成18年2月28日(火)**です。多くの方のご投稿をお待ちしております。

 申込先: センター事務室 内線1273 syogse@ao.kagawa-u.ac.jp

 問合せ先: センター専任教員 山本珠美 内線1271 yamamoto@cc.kagawa-u.ac.jp

センター雑感

◆住居の安全と子どもの安全が脅かされている。◆住居は専門ではないが、コンクリートで覆い尽くされた鉄筋の建物で日々生活している。そこに何本の鉄筋が使用されているか、どれほどの安全性が確保されているのか、あまり疑ったことがない。そこには暗黙の信頼が存在しているからだ。◆子どもについては専門領域に近接している。子どもは地域の中でこそよき社会人となる、というのが信念である。なぜなら、地域は子どもたちを育む優しく厳しい場だからだ。そこに子どもの命を奪う大人はいない。◆しかし、その安全神話は崩れ去った。少しのほころびであっても、崩れ落ちるのは早い。◆安全と安心を取り戻すには、地道な信頼関係の再構築しかなさそうである。さて、どこから手を付けようか。

◆(清國)

1. 公開講座紹介(第四回)～稲富健一郎名誉教授に学ぶ公開講座の極意～

<香川大学公開講座と言えば…>

まず最初に、過去3年間で受講者数の多かった講座Best5をご覧ください。(受講者数の多い講座＝良い講座と単純には言えませんが、ご参考までに。)

年度	部局	担当講師	講座名	受講者数
H17	理事	高津義典	いま、文明はどこへ向かうかー宗教、資本主義、地球環境、日本文明	45
	医	石田俊彦 外5名	病気になるしない知恵と工夫	43
	教育	中谷博幸	芸術と聖書	42
	名誉教授	稲富健一郎	シェイクスピアの初期ロマンティック・コメディの愉しみー人間の愚を映す鏡	39
	大教センター	最上英明	オペラの世界ードイツ文学とオペラ	36
H16	医	万波俊文 外4名	生活習慣病の予防に役立つ新しい知識	46
	教育	坂井聡・中邑賢龍 外1名(外部)	障害のある子どものためのコミュニケーション支援セミナー	43
	大教センター	最上英明	オペラの世界ー歴史をたどって	41
	名誉教授	稲富健一郎	シェイクスピア英国歴史劇の面白さー大四部作	40
	法	松尾邦之 外1名(外部)	知っておきたい年金制度	29
H15	医	阪本晴彦 外5名	血液の医学	104
	名誉教授	稲富健一郎	シェイクスピア英国歴史劇の面白さー小四部作	41
	工	山崎敏範・香川孝司・安藤一秋	パソコン入門講座	34
	経済	金東吉 外1名(外部)	インターネット時代の証券投資:賢い投資への冒険	31
	法	栗原真人	ロンドンの歴史探訪	25



過去3年のBest5いずれにもお名前が挙がっているのが稲富健一郎名誉教授(香川県立医療大学教授、英国文学)です。どのような組織にも「名物」と呼ばれる人物はいるかと思いますが、稲富先生は過去3年どころか、過去21年(昭和60年度から平成17年度)にわたって長らく公開講座をご担当頂いており、まさに香川大学公開講座の「名物教授」と呼ぶに相応しいかと思われます。

稲富先生は、英国ロンドンに留学されていた頃(1974-5, 1981-2年)、モーリー・コレッジに足繁く通われ、成人に開かれた大学に大いに感銘を受けられたそうです。以後毎年英国ロマン派の文学、あるいはシェイクスピアについて講義をご担当頂いています。教えた

受講生は、公開講座だけで、なんと延べ1,122人にも及びます！

<公開講座の極意？>

さて、そんな稲富先生に、本年度最後のNEWSLETTER発行にあたって、香大の後輩教員へのメッセージをかねて「公開講座の極意」を伺ったところ、次のようなお答えが帰ってきました。

「極意？そんなものはありませんよ。我々が大学で研究しているというのは、温室で栽培されているようなもので、外のことは分からない。教えるなんてとんでもない！講座に集まってこられる市民の方々に、自分の経験していないこと、思ってもみなかったようなことを学ぶことが主でした。シェイクスピアという主題が幸いしたとも言えますね。生きるとはどうゆうことかという問題を一緒に考える、そんなロンドンでの経験をもう一度高松で再現したい、その強い情熱に動かされているうちに、20年が夢のように過ぎていた。名物だなんて！」



【講座終了後、有志が集まってのお食事会】

2.“公開講座”考(第三回)

(1) アンケート結果から見る公開講座(その3)

今年度のNEWSLETTERでは公開講座のアンケート結果を紹介してきましたが、今回は自由記入欄に書かれたコメントを取り上げることにしましょう。まず、こんなコメントから。

「テキストの字が小さい。もう少し大きくしてほしい。」

このコメント、実は多いのです。前々号でご紹介しましたとおり、公開講座受講生の半数以上は50代以上の方です。その点、ご配慮して頂けると有り難く思います。その他、「資料の大きさは統一して欲しい。」「時間をオーバーされる方がいらっしまったが、時間内にして頂きたい。」という声もありましたので、次年度以降公開講座を担当される先生方には、ぜひ心がけて頂きたいです。

「仕事を持っている関係で、1ヶ月で毎週の企画は参加しづらい。」

「隔週か毎月1回で年間を通して頂けると有り難い。」

公開講座受講生＝主婦や退職者と思っていられちゃるかもしれませんが、会社員や公務員、自営業など、仕事を持っておられる方も受講していられちゃいます。また無職であっても家庭の事情や地域活動などで、毎週の参加が難しい方もおられます。今後企画される際の参考にして頂きたいです。

また、次のようなコメントは全教員が心しておくべきことかと思えます。

「インターネットの普及などにより、在宅でもある程度の独学で教養を入手できる時代になっているが、ぜひとも大学でしか学べないような講座の内容や専門家のスタッフによる講師の編成で充実した講座を開いてほしい。」

ところで、公開講座への参加回数とアンケート自由記入欄の記入の有無をクロスすると、リピーターほど無記入の方が多いことが分かります。公開講座受講生の3分の2弱を占めるリピーターの方々の声を聞くためにはアンケート票を工夫する必要があるようです。(文責:山本珠美)

(2) 成人教育理論の視点から公開講座を考える(その3)

前回は、M. ノールズの成人教育学(andalogy)を紹介しながら、成人の特性から導出される成人教育の原理を見てきました。これを端的に示しているのが下表です。ノールズは学習者と学習内容によって学習のスタイルを最適化することが肝要だとしています。(文責:清國祐二)

	ペダゴジー:(子ども対象の)教育学	アンドラゴジー:成人教育学
学習者の概念	学習者は依存的にとらえられ、教師が学習への責任を負うと考えられる。	学習者は成長に合わせて自律性が高まるととらえられ、教師はこの変化を促進する役割を担う。
学習者の経験の役割	学習者の経験にはあまり価値が置かれない。教師の経験や教科書、視聴覚教材等の伝達に重きが置かれる。	学習者の経験は豊かな学習資源と考えられる。学習者自身の学習への認識も経験から得たものに意味を付与しがちである。
学習へのレディネス	社会の要請が学習を生み出す。かなり標準化されたカリキュラムを同年齢に効率的に伝達することに主眼が置かれる。	現実生活の課題や問題が学習の必要性を喚起する。そこでは課題解決のための道具や手法の提供が重要となる。
学習への方向づけ	科学の論理にしたがった教科単元により組織化されたカリキュラムが学習を方向づける。未来の基礎をつくる学習である。	課題解決へつながる学習であり、即時的応用が期待される。明日の生活を変える知識や技術が基本となる。

センター雑感

公開講座紹介で取り上げた稲富先生は、本職とは別に、もう一つ「テノール歌手」という顔をお持ちです。とても60代とは思えない(失礼!)艶とハリのある美声で、オペラのアリアから日本の演歌まで、また会場もコンサートホールから温泉旅館、あるいは喫茶店など様々な場所で、数多くの名曲を披露して下さいます。小学校で宇宙戦艦ヤマトを歌われたこともあるとか。年数回は演奏会に出演されており、そのバイタリティには、ただただ敬服するばかりです。(山本)